

中島邦雄* 琉球の新外来品について (四)

Kunio NAKAJIMA : On the Newly Naturalized plants Found from Ryukyus (4)

8. セイヨウヒルガオ *Convolvulus arvensis* LINN. ヒルガオ科

花は白色で径約3cm。花冠の裏面の暈などは淡紅褐色を帯び、一見ネコアサガオ *Ipomoea hardwickii* HEMSL. を思わせるが、柱頭が着色しない。1967年5月26日多和田真淳氏によって那覇商港の路傍で採集された。筆者も同年6月下旬に花の着いたものを、那覇港の金網に巻きついているものを採集した。多分米国からの貨物について侵入したものであろう。

9. カナリークサヨシ *Phalaris canariensis* LINN. イネ科

1967年4月16日、筆者は園原先生と屋部村字宇茂佐の一農家の庭先に植えてある外来のイネ科植物をみた。その家の子供が小鳥の餌を播いたとのことで、カナリークサヨシであることが分った。本種はカナリー諸島から南欧の原産で、切花材料としてよりもカナリヤ、インコ類の高級飼料としておなじみである。日本では徳川時代にすでに記録があるが、沖縄では初めてである。平良勝吉君は1966年6月2日に那覇市首里当之蔵町の草むらで採集したものが当標本室にある。類似のヒメカナリークサヨシ *Ph. minor* RETZ. はまだ当地で記録されていない。

10. ルビーガヤ (多和田真淳) *Rhynchelytrum repens* C. E. HUBB.

1967年4月30日、筆者は北部農林高等学校附属標本館で園原咲也氏より数葉の標本を提示された。その中に野生品ではみられぬ美しい銀紫色の長絹毛がおおった一見キビ属に近似するイネ科植物をみた。その標本は沢岨安喜氏によって1966年11月12日に沖縄本島中部の北谷(チャタン)村字砂辺の海岸近くの乾燥した原野で採集されたものである。筆者も1967年5月22日同地にて採集したが、群生している。沢岨氏によれば他のイネ科等の雑草が侵入すると本種は消えてしまうという。これは文献によると南アフリカ原産で、米国 Florida, California, Hawaii をはじめ世界の熱帯から暖帯にかけて帰化している *Rhynchelytrum repens* C. E. HUBB. であることが判明した。久内清孝先生にお伺いしたところ日本にはまだ帰化をみない新外来品とのことで、和名がないところから、英名を“Red Top”または“Ruby grass”と呼ばれているところから、多和田真淳氏の御意見に同意し、ルビーガヤと称したい。年中とても美しいwine-colourの穂を出し園芸品としても有望である。水島正美博士によれば南アジアで栽培されているという。ルビーガヤは多年生。茎は高さ80~125cm、無毛、わずかに基脚は横臥、分岐する、径1.5mm位、節は紫色。葉は灰緑色、葉鞘は7.5~11cm、まれに18cmの長さになり、小瘤のある剛毛がありやがて無毛となる。葉身は長さ9~18.5cm、幅2.5~5mm、表面は粗澁、裏面は平滑。円錐花

* 沖縄名護市宇茂佐111番地 111, Umosa, Nago-city, Okinawa

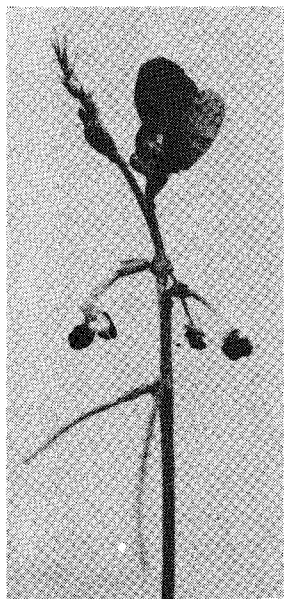


Fig. 8 タチナンバンアズキ
Phaseolus lathyroides LINN.

序は7.5—18.5cmの長さで卵形、若い時は暗赤色から帯紫色に美しく変化し、次第に銀色から黄褐色になる。枝は上向して細く、ざらざらで長さ2—8cm。小穂は長さ4—8mm、柄は毛状で波状に曲る。絹毛は長さ3—5mm。葯は2—2.5mm（長さ）で帯黄褐色。柱頭は褐色を帯びる。沖縄における花期は（3—）4—12月である。種子は長さ約1.5mm、暗褐色、倒皮針形、鋭頭、案外よく発芽する。

11. タチナンバンアズキ（初島住彦，新称） *Phaseolus lathyroides* LINN. マメ科（Fig. 8）

多和田先生の言をそのまま拝借すれば「戦後の沖縄は外来品銀座」である。米軍の出入の関係上とつびな所に見慣れぬ植物が群落を形成することは興味深い。エグウチクサネム *Aeschynomene americana* LINN. を恩納村字谷茶（タンチャ）の米軍キャンプ近くの路傍で採集した際、筆者は園芸品と見まがうアズキ属の1種を採集（1965年12月15日）した。鹿大農学部の初島先生に同定をお願いしたところ、熱帯アメリカ原産の *Phaseolus lathyroides* L. タチナンバンアズキ（新称）なる名をいただいたので、ここに記録しておくたい。本種の和名は沖縄植物目録（1967年）にナンバンアカバナアズキとある。ナンバンアカアズキ *Adenanthera pavonia* LINN. と和名が混乱する恐れがあるので、本種にはタチナンバンアズキの名を用いたい。

タチナンバンアズキは多年生蔓草で、栽培品のハナササゲ *Phaseolus coccineus* L. に比較して茎はやや太く有毛。頂小葉は濃緑色で白緑斑が入り長卵形、長さ3.5—8cm、幅1.5—3.5cm、平滑。花は長さ15—50cmの柄の上位に一对宛多数着ける。旗弁は長さ1.5cm、幅1.2cmで暗草色がかかり、竜骨弁は舌状に、内部に巻き帯白色で側弁に比べ著しく退化している。側弁は暗赤紫色、長さ1.8—2.2cm、幅1.6—1.8cm。豆果は線形、有毛、長さ6—10cm、幅0.25—0.35mm。1果の種子数10—25粒。一穂に10—25の豆果を着けたものはある種のカンザシを思わせる。花序は直立する。花期（3—）4—10（—12）月。

12. シロバナシナガワハギ *Melilotus albus* MEDIKUS

1967年5月、沢岨安喜氏は沖縄（中頭）美里村知花（チバナ）で花の着いたものを採集した。シナガワハギに似て旗弁は他の弁より長く、花は白色。牧草として栄養価に富む。シナガワハギ属は旧世界に20種を産する。初島、天野「改訂沖縄植物目録（1967）」に本種は見られない。

13. アメリカタヌキマメ *Crotalaria anagyroides* H. B. K.（Fig. 9）

沖縄本島国頭路傍に広く帰化し、中でも東海岸にそった沿道の金武（キン）、辺野古

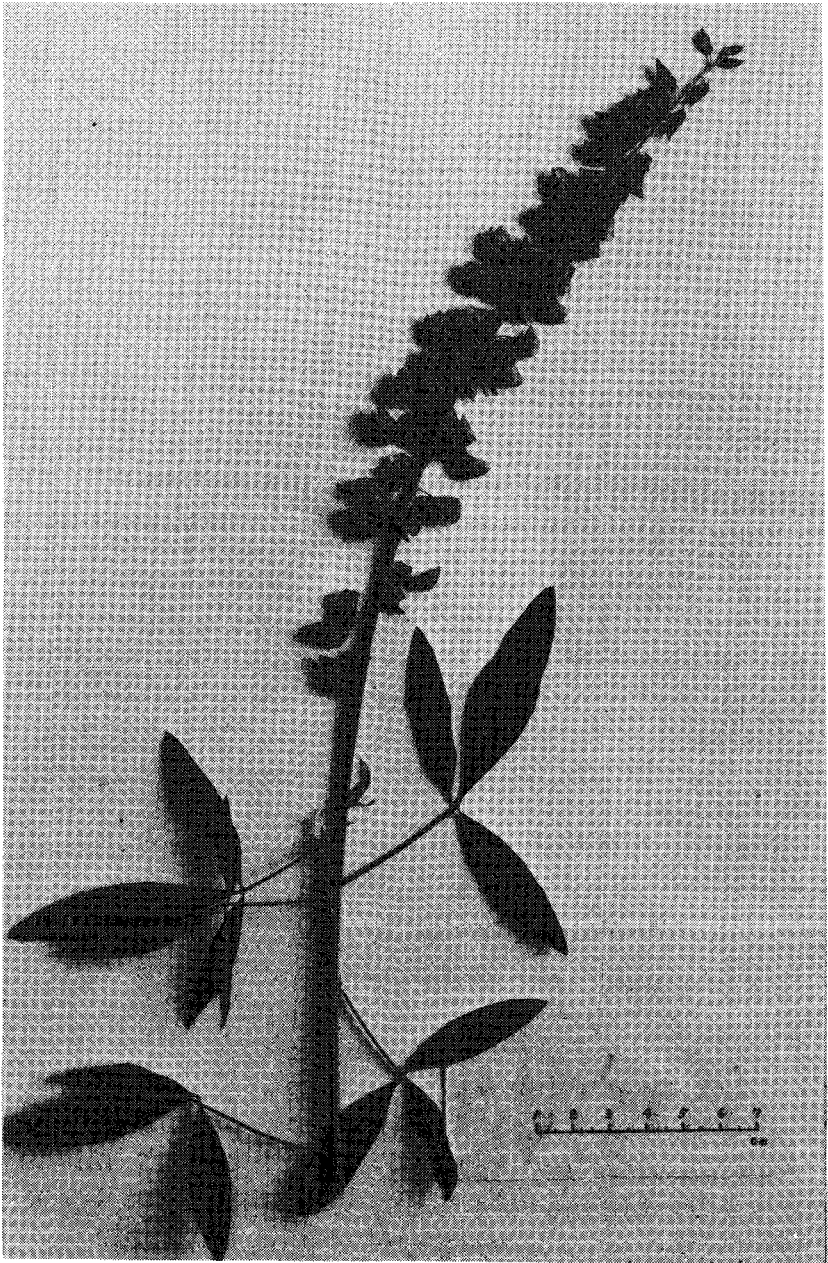


Fig. 9 アメリカタヌキマメ *Crotalaria anagyroides* H. B. K.

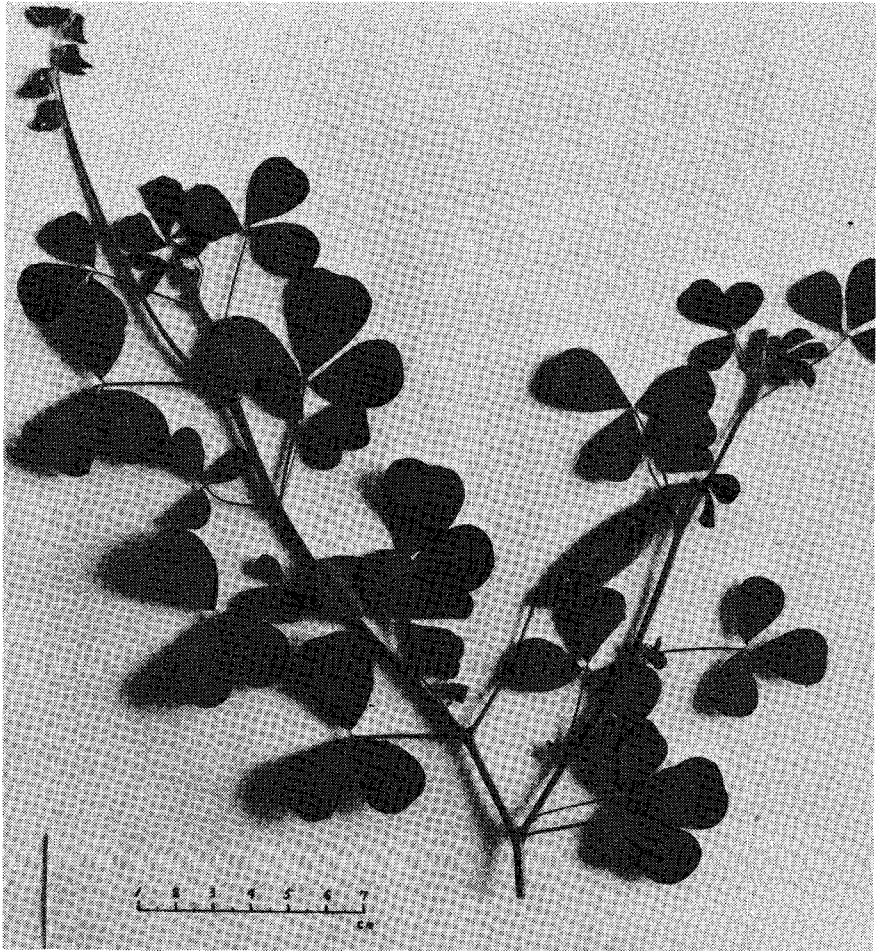


Fig. 10 インカタヌキマメ (新称) *Crotalaria incana* LINN.

(ヘノコ) および辺戸 (ヘド) に至るものは、殆んど年中花が見られる。筆者は1964年春に、高さ50—170 cmになる本種を採った。その後文献によると、ベネズエラ原産の本種であった。頂小葉は長さ3.5—12 cm, 幅0.5—2.5 cm, 柄長さ1—5 cm。15—40 cmの穂状花序に、長さ10—15 mm, 幅約12 mmの黄 (後に赤褐色となる) 色の花を密に着ける。豆果は長さ3—4 cm, 幅7—10 mm, 成熟すると黒くなる。緑肥や花材としても注目できる。

14. インカタヌキマメ (新称) *Crotalaria incana* LINN. (Fig. 10.)

筆者がマダガスカルより種子交換で入れたものは本種であった。高さ70—120 cmになりよく分岐し、茎は有毛。頂小葉は長さ1.2—3 cm, 幅0.7—2 cm, 裏面と縁に散毛, 柄は



Fig-11 ハナタチシバハギ *Desmodium sandwicense* E. MEY.

長さ1—3cm, 有毛。花穂は3—20cm, 長さ1cm位の花を(1花序に)5—20個着ける。

萼は長さ約10mm, 五深裂, 有毛。豆果は長さ3—4cm, 有毛, 成熟すると暗褐色になる。

Type locality は Jamaica と Caribaeis で熱帯アメリカに分布し, Honolulu, Africa, Madagascar, India, Philippines に帰化しているが, 沖縄にはまだ帰化をみない。外来品として明治山植物園で栽培している。和名をインカタヌキマメとしたい。

15. ハナタチシバハギ(新称) *Desmodium sandwicense* E. MEY. (Fig. 11.)

1965年の秋, 園原先生より外来品であるヌスビトハギ属1種を提示された。文献により上記の学名が分った。それはシバハギに似るも, 性質, とくに花などが著しく異なる。花が大きく, 美しい桜(淡桃)色をしているところからハナタチシバハギと新称したい。本種は多年生草本で, 茎は根部より多数でてよく分岐し, 斜上または直立して高さ60—140cmとなる。半日陰か日陰によく生育し, 生育期の茎は斜上気味である。茎, 柄(葉と花の),

托葉、苞、萼は有毛、豆果には刺毛がある。托葉は長さ3—5mm、幅約1mm。葉柄長さ2—4.5cm、頂小葉柄長さ5—15mm。葉は長さ2—6cm、幅15—25mm、緑色の表面に灰緑色の斑が中央の葉脈に入る。苞は長さ6—9mm、幅2—6mm。花序は長さ8—13cm。花柄は長さ2—6mm。萼は長さ約4mm、3裂。花は長さ約4mm、幅約9mm、桃色。豆果は長さ3—4cm（普通）、7—9節。種子は長さ約2.5mm、赤褐色、平滑。ハナタチシバハギはHawaiiのSandwich島(type locality)から知られているEndemic speciesで、英名をHawaiian tick-trefoil (locally called Spanish clover)といい、ハワイの地方ではPili-piliという。本種の異名に*Des. uncinatum* (JACQ.) DC. が知られているが、筆者は別にこの種を栽培している。後者はハナタチシバハギと一見して異り、南アメリカ産である。

本稿を草するに当たり、久内清孝、初島住彦、水島正美、浅井康宏の諸先生に多大なるご教示をいただき、また、いつも観察や閲覧を快く許可され、その上有意義な助言を賜っている北部農林高等学校附属園原植物園および標本館と園原咲也、多和田真淳、天野鉄夫、標本を恵与下さった喜久里教達、沢岷安喜、平良勝吉、それに、多忙にもかかわらず好意をもって標本の写真をご提供下さった山川亮の諸氏に対し、深く感謝の意を表したい。

本文中2, 3, 9, 12は長田武正氏他「帰化植物図譜(1967)」に、また、4, 5, 6, 8, 10, 14, 15はOtto DEGENER “Flora Hawaiiensis (1933-1946)”にそれぞれの美しい図があるから参考として欲しい。